

日岡山と加古の里（加古川市氷丘）

加古川市は、どこへいっても高い山というのがありません。ことに、加古川左岸の地は、広い三角洲〈さんかくす〉と、洪積層〈こうせきそう〉や第三紀層〈きそう〉がひろがって、ひろびろとした平原風景が見られます。

むかし、ある天皇が、はるばるこのあたりまで行幸〈ぎょうこう〉されました。あたりは、いちめん木や草が生え茂っていましたが、供〈とも〉の人をつれて狩に出られました。

平野の北方には低い岡が続いています。一行がこのふもとまで来たとき、一匹〈ぴき〉の鹿がとび出しました。みんな大よろこびで鹿を追い、つかまえようとした。すると、鹿は、「ひひ。」とないてこの岡にのぼり、姿を消してしまいました。これ以後、このおかを「ひひの岡」と呼び、それがつまって「ひのおか」となりました。村の名につかわれた「氷丘〈ひおか〉」山の名を記す「日岡〈ひおか〉」は、いずれも、このことばを文字にあらわしたものです。

また、この丘の形が「鹿の子」に似ているというところから「鹿子〈かこ〉」と呼び、あたりを「鹿子の里」と名づけました。「賀古〈かこ〉の里」あるいは「加古〈かこ〉の里」という文字が使われるのは、それより後〈あと〉のことです。

（『播磨国風土記』）

